

# 私の幼児教育論（その四）

## — 幼児の集団と大人 —

佐藤文子

子どもを幼稚園に入園させる動機として、「家庭では与えることのできない集団生活の体験をさせるため」と答える親が多いことを前回記しました。幼稚園が幼児の集団生活の場であることは

誰しも認めることでしょう。そうすると同じように小学校は「児童の集団生活の場」としてとらえられるべきでしょうが、小学校はむしろ「勉強するところ」として親にはとらえられているようです。小学校の方はさておいて、幼稚園が幼児の集団生活の場であり、そこでの経験は家庭で与えることができないものであるということを認めて、それでは幼稚園での子どもの集団とはどういうものなのか、そこで子どもは何を経験しているのか等に関心をもち親は意外に少いようです。実際には親は子どもを入園させる

と、幼稚園を便利な子守役として一切おまかせしたり、あるいは「幼稚園で今日は何を習ってきたの」と、文字や数、あるいは歌や遊戯等の目に見えるものの習得に興味をもつようです。

一方保育者の側でも、自分が担任となった組の学級経営に苦心はしても、それを人の一生の発達という展望の下に位置づけないが、今の時期にどんな集団を形成し、どんな経験をさせればよいのか、明確な見通しに立って指導している人は少ないのではないのでしょうか。幼児教育の専門家の中には、早期の集団生活を重視し、乳児期のできるだけ早い時期に集団生活を始めることを主張する人もいます。かと思うと一方ではまた、乳幼児の家庭教育の重要性を説く人もいます。こうした状況の中で、保育者もよほど

しつかりした思想的理論的背景をもたない限り戸惑いを感じ、結局は園の方針等を避け所にしてしまっています。

しかし、学者と言われる人が立派な理論を提出しても、幼児教育に関してはそれが保育者を通して実践されない限り、空理空論に終ってしまふのであり、しかも保育者自身が納得できない理論をもって保育に当たっても、保育者が困惑するばかりでなく、子どもまで混乱してしまふところに、幼児教育の難かしさがあります。幼稚園教育が百年の歴史をもちながら、その方法や内容にあまり変化がないというのも、あるいはこの辺りにその原因があるのかもしれない。

幼稚園教員の養成にかかわっている者として、幼児教育の前進は先ず教員の意識の変革からと考えないわけではありませんが、私は、保育者自身が子どもとかわる中で、どうすべきか、何が必要かを考え、自分の理論を生み出し、実践していくことが最も大事なことだと考えます。

今回は、私が幼稚園で子どもを観察したり、子どもと接触しながら、幼児の集団に関連して、感じたり、考えたりすることの二、三を述べてみたいと思います。

私は、乳幼児期の集団生活を決して軽視するものではありませんし、幼児が仲間と接触しながらいろいろと学び、成長、発達していくことを否定しません。しかし子どもがとにかくいっしょにいれば、そこに発達にプラスの経験が生ずるという考えには疑問を感じます。大人とのかかわりが全くない乳幼児集団というのは、現実にはありえないので、子どもだけの集団の中で子どもがどのように発達するのかわかり得ないのですが、私の推測では、子どもだけの集団というものは力関係の支配する厳しい世界だと思えます。従って私は、子どもだけの集団を過大評価することに危険を感じます。大人と直接の接触はなくても、大人の世界の価値と秩序が子どもの世界に入り込むことによって、子どもの世界に秩序ができるのであって、むしろ重要なのは大人の世界に通用している価値と秩序がどういうものかを問うことです。誤解のないように申しそえますが、私は決して大人の価値や秩序を子どもに押しつけることを主張するものではありません。

子どもの世界が力関係の支配する世界だということについて、私の観察例を二つばかり、次に述べてみます。

(一) 幼稚園三歳児、十一月末、みんなでチューリップの球根を花壇に植えた後、担任の先生が一寸の間その場を離れた。すると

子どもたち六、七人がすべり台のついたジャングルジムに登り始めた。E子がすべり台の頂上近く登った時、下からM子が登ってくるのを見て、「M子ちゃん私がすべってからにして、順番なんだから」とM子が登るのを制している。ところがそのすきにM夫が右側のジャングルジムからすべり台の上に登り、すべり出したら、E子はだまってそれを見ている。M夫はすべり終ると再びすばやく横から登ってもう一度すべる。こうしてM夫が二度、三度すべるのをM子はだまって見ている。

この時期の女の子は、全般に、運動面の発達では男の子より遅れており、ジャングルジムを下から真直ぐ登ることはできても、M夫のように横から斜めから自由に登ることは難かしいのです。それにM夫はクラスでもボスというほどではないが一目おかれている子です。

三歳児もこの頃には仲間に入りたい時は「入れて」と言うし、順番も守ることはできるのですが、担任の先生の姿の見えない子どもだけの世界でM夫は力にまかせて横から入ろうとするし、M夫が自分より強いことを認めているE子はM夫のそのような行動を見越すが、自分より力が弱いと感ずるM子には順番を守ることを要求します。

私は、こうしたE子やM夫の行動を見ながら教師の存在を改めて考えさせられました。E子やM夫は、教室では先生に強制されるから規則を守るが、先生の見ていないところでは規則を無視すると解釈するのは、あまりにも大人の側の見方でしょう。私は教師が規則を教えるというより、教師が秩序の代表者としてそこにいる時に、子どもの世界に社会秩序が育っていくのだと思うのです。と同時にその秩序が子どもの中に本当に生きて機能するためには、場面場面での緻密な指導が必要とされます。それについては、次の例も合せて考えてみたいと思います。

(二) 五歳児、七月、お天気が良く組全員が園庭で遊んでいる。K夫は体も小さく、全般に幼い感じの子で、日頃も集団の遊びに入るより一人遊びが多い。この日も元気のよい男の子が五、六人群をなして園庭の遊具を、あちこち移って遊んでいる。K夫は一人すべり台で遊んでいたが、先の子どもの群が「たか鬼」をすることに決めてポートぶらんこを離れると、K夫はぶらんこに近づいて乗ろうとする。すると先の子たちが戻ってきて、「あ、Kちゃんのっちゃだめ」という。K夫は一瞬たじろぎ、乗るのを止める。私がお子に「どうしてKちゃんのっちゃいけないの」ときくと「どうしても」と答える。「『どうしても』ってどういうこ

と」ととききかえすがだまっている。その間K夫はぶらんこの端の方で後ろ向きになって黙っている。今度はK夫に「Kちゃんのりたいでしょ。どうして入れてもらわないの」ときくと、K夫は振り向いて小さい声で「のせて」というが相手の子たちは聞こえないふり。その時、別の男の子が遠くから「仲間に入れて」と走ってくる。そうすると例の子どもたちは「いいよ」と言って乗せてやる。その時、しばらくの間姿が見えなかった先生が現われ、組全体で別の活動に入ったため、私の介入もそこで終った。

このような光景は幼稚園にお馴染みの方には殊更珍らしいものではないでしょう。強い子たちが去った後ぶらんこに乗ろうとするK夫、それを見て「Kちゃんだめ」と制する子、だまって引き下がるK夫、ここで子ども同士の交渉は終わります。「どうして」と問えば、「どうしても」という答、しかしこれでは一歩も前進していません。勿論、こういう場面に出会った先生方はそれぞれに指導を試みられていることと思います。

私は、丁度その頃、ある目的からいくつかの幼稚園で発達検査をしていました。子どもと検査場面で接触しながら、幼児のこと

ばの発達と自己表現についていろいろと考えさせられました。数概念や抽象能力は発達しており、そして知識としての語いは豊富でありながら、自由に自分を表現することが求められる場面では口を閉ざしてしまふ子、逆に自分の言いたいことは自由に話すのが、概念化、抽象化が難かしい子………子どもの反応は一人一人違いながら、何人かの子どもに接していると、幼稚園毎の特徴と呼びたいようなものが感じられて、それぞれの園の指導を思い浮かべてみました。

ことばの発達は子ども同士の知的発達と密接に関連しているため、多くの親は子どものことばの発達について非常に敏感です。正しく発音できるか、どの位単語を知っているか、文章の構成はどうか、あるいは文字をどの位読めるか書けるか等に親は非常な関心をもちます。そしてこれらは確かに言語発達についてのある程度の目安となります。しかし幼児期のことばの発達をこの側面からだけとらえるのは不十分です。先に挙げた概念化、抽象化の能力は知的発達の指標であり、言語発達と密接に関係しています。そしてそれは私たちが周囲の世界を知るその仕方に関わってきます。このようにことばの発達は知的発達と密接に関係しています。ことばの発達を子ども的人格面と切り離して知的面からのみとらえることは理論的に可能であっても、子どもの教育という点

からは問題を感じます。

ことばには大きく分けて、コミュニケーションの手段としての機能と思考の用具としての機能という二つのはたらきがあります。この二つの機能が幼児期においてどのように関連し合っているのかということに関しては議論のあるところで、ここではその詳細にふれる余裕はありませんが、研究者の中にはコミュニケーションの手段としての機能は、子どもが人と接触する機会さえあれば自然に発達するが、思考の用具としての機能の方はそうはいかないので、幼児期の言語教育は後者、すなわち思考の用具としてのことばのはたらきの面を育てる方にむけられるべきだと主張する人もいます。私も概念化や抽象化の能力、思考の用具としてのことばのはたらきが成熟に伴って自然に発達するとは考えませんが、しかし前者、コミュニケーションの手段としてののはたらきえには賛成できません。勿論、ある程度までは発達するでしょうが、望ましい対人関係、集団を發展させるようなコミュニケーションができるようになるためには、どうしても幼児期の指導が大切だと思います。更に、コミュニケーション、思考、いずれにしても、それが個人において有効にはたらくためには、個人の自我の発達に支えられていなければなりません。そのことを考える

と、私は幼児期には自己表現の力を伸ばす指導が大切であり、これが、結局はコミュニケーション、思考両者の発達に連なるものと考えます。

このことについて、先の例に戻ってもう少し説明を加えたいと思います。私が自己表現というのは、第二の例について言えば、「どうしても」を明確に表現させることです。大人の場合、理由ははっきりしているが表明したくない場合、「どうしても」と誤魔化しますし、また言語的にうまく表現できなくて面倒な時、「どうしても」と言ってしまうことがあります。子どもも五歳位になると、理由は明白でも言いたくないので、「どうしても」を使う場合もありますが、大抵は何となく感じているが、きかれるとどう言っているかわからない、それで「どうしても」、「わからない」と答えることが多いようです。しかしこれは単に表現技術の問題ではありませんし、また知的に発達すればはつきり言えるようになるとは限りません。「どうしても」を繰り返していたのでは、対人状況が進展しないばかりでなく、子どもの自我それ自体の発達が停滞してしまいます。

自分の行動のよって立つその漠然とした理由を言語的に表現す

ることによって、自分自身そうだったのかと納得したり、それに對する相手の反応を見ることによって、自分の理由づけが正しかったのかどうか確認もできます。そして、そうした相互過程において、ことの重大さに気づいたり、逆にたいしたことでないとかかったり……自分自身の心の動きが自分にはっきりしてくると同時に、相手の気持もよりよく理解できるようになります。理由がはっきりしている場合でも「どうしても」と誤魔化しているうちに、次第に自分自身も相手もわからなくなってしまう。

これは仲間に入れてもらえなかった方についても同様で、ただ引き下がるだけでは全く進展しません。勇気を出して「入れて」と言ってみても「いや」と言われればそれきりになります。しかし五歳児になればもう一歩進んで「どうして入れてもらえないのか」を確かめさせることが必要でしょう。この点については、恐らく幼稚園の先生方も指導しておられることと思います。しかしこのような自己表現——自分の気持を言語化し、自分自身に、そして相手に伝える——は繰り返しますが決して単なる表現技術の問題ではないし、また単に仲間はずれのない仲良し集団を作るための手段にすぎないものではありません。それは自分自身を知り、他の人を知るといふ、子どもの自我の発達に基本的に重要なことにかかわっています。そしてそれは子ども同士が接触してい

れば自ら育つものではありません。そのような自己表現の力を育てるためには、子ども同士の相互交渉と同時に大人の援助を必要とします。「援助」ということは誤解を招きそうなので、以下少し協道にそれて、カウンセリングのことにふれながら、私の用いる「援助」の意味を説明しておきたいと思えます。

カウンセリングにもいろいろな立場があります。カウンセラーが来談者の悩みをきいて助言や指示を与える、これも一つの立場であり、このような方法が有効な場合もあるでしょう。しかし一つ一つの問題の解決ではなく、問題をもつ私自身が変化する、そのためにはカウンセリングを通して私自身の自我が再体制化されなければなりません。自我の再体制化などと言うとおおげさな気がします、大切なことは、私の身体と心の全てが私に語りかけてくることに耳を傾け、自分自身を受入れていくことです。刻々に移りゆく生命の流れの中に自分自身をおき、流れのままに動いていく、そして刻々に移りゆく体験過程を言語化する、それが的確になされた時、自我体制が少しずつ変化していきます。しかし言語的にとらえた体験過程はすでに過去のものであり、私はまた今の体験に耳を傾けなければなりません。そのようにして、刻々

に新しい自分に出会い、新しい自分に成って、いくのです。この過程はまた自分自身に真実になっていく過程でもあります。このような過程において、問題は刻々に新しい視野の中に見えてきます。

勿論、このような変化は容易になされ得ることではなく、ここにカウンセラーの援助が必要となります。しかし援助と言っても、先ずカウンセラー自身が自分に真実で、自分の体験過程に敏感であり、自分自身を受入れているということが条件であり、その上に立って来談者の体験過程に敏感に素直に応ずることができるといことが要求されるのです。来談者自身受け入れられずにいる体験や感情を、カウンセラーが的確に言語的に表現することによって、来談者は自分自身に出会い、自分自身を受入れることができるようになります。このようなカウンセリングの過程で、カウンセラーと来談者の間に刻々に新しい状況が生れ、来談者だけでなくカウンセラーも変えられていきます。それはまさに出会いであり、生成 (Becoming) の過程です。このようなカウンセリングについての研究は、人間が基本的に関係において存在するものであることを教えてくれます。

私が先に「大人の援助が必要」と言ったのはこのような意味の「援助」の必要を述べたのです。子どもたちの「どうしても」を

「どうしても」で終らせない援助が教師からなされる時、K夫と他の子どもたちの間に新しい状況が展開するでしょう。K夫は自分の行動が他の子たちにどう受けとめられているかに気づくかもしれないし、いっしょに遊びたい時にはどうすればよいかを知りかねない。他の子どもたちは、その時のK夫の反応から、それまで知らなかったK夫の姿に気づくかもしれない。……こうしてK夫と他の子どもたちの間の交渉が進展する中で、K夫も他の子どもも成長していきます。

これまで述べたことはどちらかというと、コミュニケーションの発達、社会性の発達に関わるものと考えられるかもしれませんが、です。けど幼児期にあつて自分の気持ちを正しく表現するために、正しい発音、適切なことば、正しい文章構成等を学んでいかなければならないことは言うまでもありません。カウンセリングなどの場面では表情その他状況の手がかりを媒介として相互の交渉が展開していきますし、対人関係の仕事に従事する場合には、そのような状況の手がかりを敏感に用いることも必要でしょう。しかし私は望ましいコミュニケーションを展開させるためには、先ず自分や環境について正しい認知とその適切な表現が必要であ

り、そのための指導は思考の用具としてのことばの指導と密接に  
関わってくると思うのですが、この問題に深く入ることは紙面の  
都合上、また今回のテーマからも控えることにします。

子どもの「どうしても」を「どうしても」で終らせない援助を  
するためには、大人自身、自分と他人に真実に自己表現できるこ  
とが要求されます。そして子どもの刻々の心の動きに敏感に対応  
しながら、子どもと出会い、大人自身変えられていきます。その  
ような大人と共にいる時、そこには外側から強制されていっしょ  
にいる集団ではなく、互いに真実に、開かれた仲間集団が育つ  
のではないでしょうか。

|| 終り ||

(秋田大学)

